

高等学校英語指導資料「英語表現 I」

EXPRESSWAYS English Expression I

英語で表現する早道



武蔵高等学校中学校教諭
手島 良

1 はじめに

EXPRESSWAYS I という「英語表現 I」の教科書を作りました。お察しのとおり、「表現の道」と「高速道路」とを掛け合わせた題名です。表現力を高めるにあたって、できることなら、それが早く身につきますように、という願いを込めています。もちろん「早く身につきますように」というのは生徒の立場に立った言い回しで、我々教員にしてみれば、合理的な指導をして「少しでも早く身につけさせられますように」となります。

言うまでもなく、「英語表現」とは「受信型の英語」の対極にある「発信型の英語」のことです。その「発信型の英語」を身につけさせるためにはどんな教科書を編集すればよいのか。議論に議論を重ねた結果がここに結実しました。

それは、文部科学省的に言うところ「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」ための教科書、ということになります。

2 基本的な考え方

編集を始めるにあたって大切だと考えたのは、当たり前といえば当たり前になりますが、たとえば、次のようなことです。

- 1) 日本語でなら難なく言える「書ける」ことから
- 2) 生徒が言いたい「書きたい」と思うことを
- 3) 現実的で実用的な内容を
- 4) まずは生徒自身の等身大の「自己表現」から
- 5) よい「型」を提示して、その「型」を押さえることから

こうした基本的な考えをもとに、中学校で学んだ英語に肉付けする形で、高校生にふさわしい発展的な「英語表現」力を身につけさせる教科書を作るべく、著作者一同で次のような構成を考えました。

(1) 全体の構成

まず、全体を大きく3つのPartに分けることにしました。

Part 1 (Units 1～8)は「身近なことを表現しよう」。とりあえず、自分やそのまわりの人やものについて表現してみようというわけです。身近な事柄について表現するのですから、「資料にあたっていろいろ調べて…」などという面倒なことをする必要はありません。とにかく、日本語だったら比較的簡単に言える「書ける」ことを、英語で表現することに慣れてしまおう、という寸法です。それぞれのUnitにはテーマが設けてあります。そのテーマに沿った文章が書けるようになるための仕掛けを丁寧に準備しました(詳細はあとで説明します)。

次のPart 2 (Units 9～16)は「表現の幅を広げよう」。(実はここでも背景にあるのは「身近なことを表現する」ということなのですが、それは表に出さずに) Part 1で行った練習を受けて、英語っぽい表現に近づくためにはこんなことに気を配るといいよ、というプラス・アルファのコツを身につけるPartです。

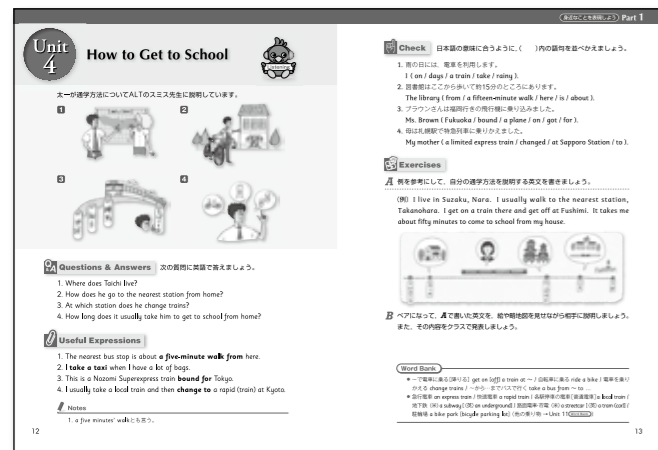
最後のPart 3 (Units 17～19)は「自分のことばで表現しよう」。ここまでのPartsで学習したことを最大限に活かして、言わば「最後なんだから、できるかぎり自力で表現してみよう」という総仕上げのPartです。

(2) 各Partの構成

● Part 1 「型」を押さえて身につける

「英語表現」だからと言って、「話す」「書く」活動(・練習)

だけを行えばよいというわけではありません。前述のように、それぞれの Unit にはテーマがありますから、まずそのテーマに思考を向ける必要があります。そこで、「取っ掛かり」としてリスニングから始めることにしました。そのテーマに関して耳から脳ミソを刺激しようというわけです。念のため、ちゃんと聞き取れたかどうかを Questions & Answers で確認しておきます。



Part 1 Unit 4 (pp.12-13)

こうして頭の中がそのテーマに方向づけられたところで、今聞いた英文の中にあった大切な表現を Useful Expressions でいくつか取り上げます。取り上げる基準は、単に重要であるかということだけではなく、このあと使えるようになってほしい表現かどうかです。

ここで確認した表現は、右のページの Check で確認します。単文 (sentence) を使った簡単な練習問題ですが、ここで Useful Expressions の念押しをするわけです。

—と、これで、その Unit のテーマに則した事前準備が終了。このあと、実際に表現する作業に入ります。その名も Exercises です。

この Exercises は複数形になっていることからおわかりのように、1 つではなく、2 つの作業に分かれています。まず最初の Exercise A です。

Unit によって作業が少し異なりますが、例えば、文章 (passage) の中で使われた Useful Expressions の表現を確認する Unit があります。そうした Unit では、Useful Expressions が別のコンテキストで使われている例を改めて(しつこく!?)見せられることになり、その表現にさらに馴染むことができ、実際に使ってみる準備が整います。

また、Unit によっては、最初リスニングで聞いた英文よりも短い文章が載っている場合もあります。その英文は、これから表現する英文の「お手本[モデル]」で、同じテーマの、短めでやさしめの文章を読むことで、「あ、こんな感じで書けばいいのか」と表現への意欲をかき立てられる

仕組みになっています。これを大いに参考にしつつ(実際、広い意味での語句の入れ換えで、生徒自身のことが表せるようになっていきます)、生徒自身が英文を書くことになり

ます。というわけで、Exercise A で「文字」による表現が終わります。ところが、これでおしまい、というわけにはいきません。表現には「音声」によるものがあるからです。

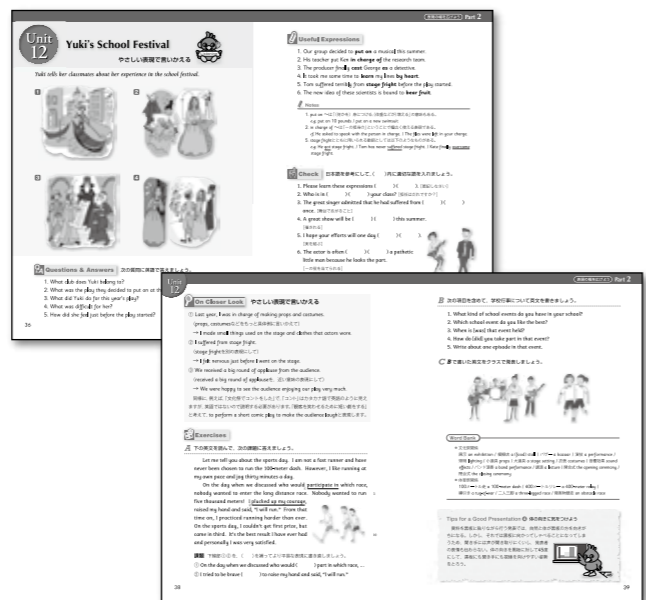
そしてこの「音声による表現」つまり「発表活動」を実際に行ってみるのが Exercise B です。

ちなみに、Exercise A で自分自身のことを表現しようというとき、生徒が使いたいと思われる表現は、Word Bank 欄にできるかぎり収めてあります。

● Part 2 身につけた「型」を展開

Part 2 は、Part 1 で英語の文章を書くことに慣れた生徒を、もう少し長めの、そして、もう少しまとまりのある文章を書かせるようにしようという部分ですが、各 Unit の基本的な構成は Part 1 と変わりません。つまり、次のとおりです。

1. テーマに関する文章に触れる (Part 2 では音声だけでなく文字による導入もあります)
2. 内容理解の確認をする
3. 表現の確認・練習をする
4. 同じテーマの別の文章に触れる
5. 自分で書く
6. 書いたものを発表する



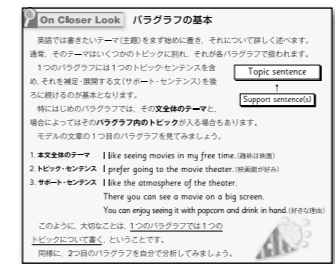
Part 2 Unit 12 (pp.36-39)

ただ、もう少し長めでまとまりのある文章を書かせるために、Part 1 にはなかった指導内容を入れました。それは、Unit 2 では各 Unit のテーマに加えて、長めの英文を書くとき、また、音声で発表するときに必要な、最小限の

ポイントについての On Closer Look というコラムを添えたことです。

Unit 9 から Unit 16 まで、そのポイントを順に挙げてみると、

- ・パラグラフの基本
- ・抑揚(イントネーション)と意味
- ・列挙のしかた
- ・やさしい表現で言い換える
- ・内容構成の検討
- ・聞き手への問いかけ
- ・対比・対照のしかた
- ・例示の大切さ



On Closer Look (p.26)

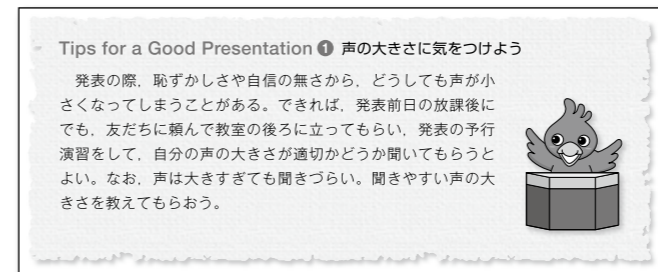
となります。

単行本と異なって、教科書にはページ数に制限がありません。ですから、上で述べたように、必要最小限のポイントに絞ってありますが、各 Unit の冒頭で示される文章の中に織り込まれたこうしたポイントを理解し、それを生徒たち自身が書く文章、あるいは発表する文章の中で使ってもらおう、という発展的な形にしました。

まとまりのある文章を書かせようというのですから、Part 1 に比べて、当然、冒頭の文章も長くなっています。

いずれにしても、適切な(音声での)発表をするには、適切な発表を耳で聞いて、その特徴を知っておく必要がありますし、音声発表のための適切な文章(スクリプトと言ってもいいでしょう)を書くには、適切に書かれた文章に触れておくことが不可欠です。この Part 2 でも Part 1 と同様に、その基本姿勢は堅持しました。

なお、クラスメートの前での発表にも慣れてきたこの時期ですから、少しでもわかりやすく上手な発表をさせたいものです。そこで、発表するときにまず心がけたいことを 8 つの Tips for a Good Presentation にまとめました。ここに挙げてある、ほんのちょっとしたコツを実行するだけで、発表の質が大きく変わるはず



Tips for a Good Presentation ① (p.27)

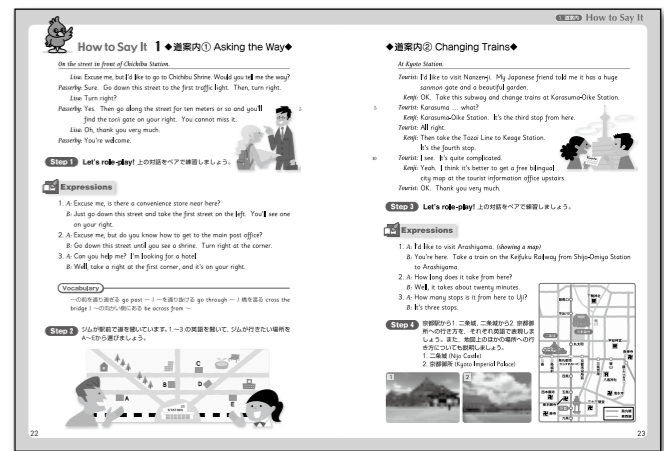
● Part 3 「型」を破って新たな世界へ

上にも書いたように、Parts 1 & 2 で学んだことを活かす総まとめの Part です。3 つの Unit しかありませんが、「昔話の要約」や「絵画の紹介」などを行いながら、自力で長めの英文を書き上げ、その発表に挑戦します。

(3) そのほかの構成と特長

このほかに、How to Say It という、音声表現に特化したセクションが4つ設けてあります。そのテーマは一見、月並みな「道案内」「旅行」「食事」「買い物」ですが、ある意味でひとひねり加えてあるという自負があります。これは個人的な偏見かもしれないのですが、いわゆる「英会話本」の会話には「予定調和」が多すぎるように思います。つまり、「聞き手が何かたずねたら、相手は必ず答えを知っている」とか「話し手は自分が言いたいことをいつでもすらすら、淀みなく言える」といった類いです。

こうした“予定調和”的会話が学習者に与える心理的影響について調査した研究があるかどうか知りませんが、ひよっとしたら学習者は「英語では“知らない”ということは許されない」とか「英語話者は何でも知っている万能人である」といった誤解を招いてはいないか、と(ちょっと誇大妄想的に)考えたりもするのです。



How to Say It 1 (pp.22-23)

そこで(というわけでもありませんが)、この How to Say It では、より自然で、実際にありそうな形での会話を展開しています。

例えば「道案内」の中ではこんな会話が交わされます。外国人旅行者に京都市内で道をたずねられた賢治君。一生懸命、説明するのですが、「それは複雑だ」と言われて、結局、I think it's better to get a free bilingual city map at the tourist information office upstairs. と「言い放つ」場面があります。説明された側はどんなにその道順がわかりにくくても乗り換えがたくさんあっても、ここで「わかりました。ありがとう」と応じるのが“予定調和”的な会

話の典型でしょうが、ここではそうではありません。

“予定調和”ではありませんが、ある意味で「英米文化」に触れるセリフも用意しました。「食事」の中に、ファーストフード店での会話が載っているのですが、ハンバーガーとチーズバーガーを注文したあとで、*Oh, no pickles on the cheeseburger.*, *アイスティーとコーラを注文しながら、No ice in the cola, please.* と依頼する場面があったり、また注文の最後に *Can I have some more paper napkins, please?* と求める場面があったりします。ちなみに、最後の例に対する店員の返答は、これまた“予定調和”的な *Yes, sir [ma'am].* ではありません(返答が何かは教科書で探してみてください)。

このほか、「買い物」の中では、先が尖った絵筆を買いに行ったのに、平筆の棚に案内される場面や、「如雨露」を買いたいのに、それに相当する英語を知らず、悪戦苦闘しながら店員に伝えようとする場面もあります。

こうした英文に触れることで、英会話は完璧なものばかりではない、ということが伝われば、それはそれで執筆者冥利に尽きるというものです(ちょっと大袈裟ですが)。

3 フォントのこと

教科書を出版する際に決めることはいくつもあります。内容面に関しては上に書いたような最終形になったわけですが、それ以外に、判型・紙の質・文字の大きさ・色使い・イラストのタッチ等々、それはそれは様々なことを考えなくてはなりません。多くの場合、それは生徒にとって(そして、先生方にとって)親しみやすく使いやすいものであるかが基準となります。

この教科書ではこれに加えて、もう1つ重要視したことがあります。それは文字の種類、つまりフォントです。高校生とは言え、まだまだ学習途上。日本における「国語」で言えば、小学生レベルと譬えてはいけな shouldn't でしょうか。

そう考えると、日本語における教科書体のように、できるだけ教育的に適切な書体を選ぶべきだということになります。

その結果が、**Sassoon font** です。英国の書家であり文字指導の研究者である **Rosemary Sassoon** さんが心理学者と共同で開発したフォントです。一見して、目に優しい書体だということがおわかりいただけると思います。本文のほとんどで使いました(**Check** や **Exercises** で使っているのも **Sassoon** 体の別種です。ちなみに、本誌で使っている英字もこの **Sassoon** 体です)。

4 おわりに

以上、**EXPRESSWAYS I** という「英語表現 I」の教科書について、著作者の1人としてその編集の意図をご説明いたしました。

「2. 基本的な考え方」の5)にも書きましたが、まとまりのある文章が書けるようになるために、まとまりのある文章を「見習うべき型」として提示し、生徒はそれをアレンジして自分の文章にする、というのが根底に流れる方針です。「表現」ということを考えるとき、この「型」は非常に重要だと考えます。

(中村勘三郎さんの言葉として聞いたことを、自分なりにアレンジして言えば)いったん「型」を身につけたあとは、もちろん「型」どおりに無難な文章を書き続けるのも一つの方法ですが、個性を発揮したければ「型」を破って、一つ上の段階に進むこともできます(このことを「型破り」といって、賞賛するわけです)。ところが、基本形たる「型」が身につけていなければ、その人は何をやっても(ここでは何を書いても、発表しても)出てきた結果は「型無し」にしかならないのです。

この教科書を使った指導によって、「英語で表現する早道」が生徒の目の前に広がることを強く信じています。

高等学校英語指導資料 「英語表現 I」

EXPRESSWAYS English Expression ① 英語で表現する早道

平成 25 年 5 月 24 日発行

発行 開隆堂出版株式会社 113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1 電話 (03)5684-6115

印刷 杜光舎印刷株式会社 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-20-9 電話 (03)3802-4545